

# W杯1000試合目 主役は日本



チュニジアに勝利した日本の選手たちに声援を送るサポーター  
=21日、いずれもモンテレイ (共同)

メキシコの地で主役を演じたのは日本だった。サッカーのワールドカップ(W杯)は1930年7月13日、南米のウルグアイで幕を開けた。96年の歴史を持つ祭典は20日の1次リーグF組の日本―チュニジアが通算千試合目の記念すべき一戦だった。4-0の完勝劇で日本サッカーの確かな成長を世界に示した。

キックオフ前、スタジアムでは過去の大会の名場面が流れた。大型スクリーンにはペレ(ブラジル)クライフ(オランダ)マラドーナ(アルゼンチン)ら名手に加え、メッシ(アルゼンチン)がトロフィーを掲げる前回大会の映像もあった。世界のサッカーは長く欧州と南米がリードしてきた。

## 96年の歴史、メキシコで示した成長

### 森保監督「世界が見つめた勝利、うれしい」



日本―チュニジア戦でW杯通算千試合目を知らせる競技場内のモニター

た。日本もかつてはW杯出場が夢のまた夢とされた時代を経て8大会連続出場の常連国になった。そして今大会、優勝を目標に掲げる森保一監督は「記念になる試合を世界中が見てくれていたと思うが、その試合を勝利で飾ることができてうれしい」と誇らしげだった。

#### 地元客もコール

5万1243人が埋めたスタジアムは日本を後押しした。日本人サポーターによる「ニッポン」の大合唱だけでない。地元観客の「ハポン(日本)」「コールも響き渡った」。

2得点の上田綺世(フェイエノールト)は「青いユニホームを着ているのが日

本人だけじゃないというのは、日本代表が結果を残せているということの表れ。日本がリスペクトされている部分があると思う」と意義を語った。

#### 進化した姿

メキシコで日本が世界を驚かせたのは、得点王に輝いた釜本邦茂さん(故人)の活躍で銅メダルを獲得した68年のメキシコ五輪だ。チュニジア戦のスタンドでは同五輪代表だった松本育夫さん(84)が見守っていた。先人たちの歴史を引き継いだ日本がピッチで躍動していた。今では多くの選手が本場の欧州で世界のトップ選手としての力を磨き、個人が上田だろう。1点目は強烈な右足シュート、2点目は体の強靭さを物語るような滞空時間の長いヘディングだった。

松本さんは「1点目は釜本の全盛期のシュート、それを上田がやった。(2点目は)釜本はあそこまではいかなかったと絶賛し、進化した日本の姿を目に焼き付けた。「監督以下、全員が日本のサッカーを進歩させたいというプレーを90分間見せてくれた。メキシコまで来たか良かった」と後輩たちを頼もしそうに見詰めた。(モンテレイ共同)

上の記事を読んで、下の英文の( )に適切な数字を入れて、英語の説明文を完成させましょう。

The (①)th match in FIFA World Cup history was played between Japan and Tunisia.  
(チュニジア)

Japan beat Tunisia (②) - 0.

Ueda scored (③) goals.

The (④) Olympic Games were held in Mexico.

A player who played for Japan at that time also cheered on Samurai Blue at the stadium.

